外国人日本語学習者の格助詞「を」「に」の習得過程

蘇 雅玲・吉本 啓・佐藤 滋
東北大学　国際文化研究科
miyabisu@insc.tohoku.ac.jp

1. はじめに

外国人日本語学習者にとって習得しにくい文法項目の１つとして、複雑な働きをする格助詞が挙げられる。近年第二言語としての日本語習得研究が盛んになりつつある中、格助詞に関する研究がたくさん行われ、誤用が生じる原因もこれまで様々に解釈されてきた。しかし、「を」「に」の異同、また「を」「に」をめぐる学習者の誤用の原因に焦点を当てたものは未だ少ないのが現状である。

「を」「に」に関する誤用を母語 (中国語、韓国語、マラーティー語) 別に収集し、述語の語彙的意味分類に注目して統計分析を行い、その要因を検討する。同時に「を」「に」の誤用もまた母語の干渉によるものとそうでないものとの二通りに分けられ、各々の要因がどの程度関わるのかは学習者の母語によって異なるという仮説の妥当性を検証する。それを通じて格や動詞の意味タイプ、および日本語と学習者の母語の文法との異同が「を」「に」の誤用にどのように影響しているのかを解明する。

2. 調査とデータ

「を」「に」の習得過程における誤用について、文法テスト式アンケート調査を使って考察する。学習者の誤用が言語転移によるかどうかを判定するには、調査対象である学習者の母語が１つだけでは難しいので、調査対象を中国語 (台湾) 、韓国語およびマラーティー語 (インド) の母語話者に設定した。こうすることで、言語間の距離が第二言語習得に影響するかどうかを検証することが可能であり、誤用が言語転移によるものであるか否かということも明らかにされると考えられる。各々の言語を母語とする初級と中級の学習者に対して、それぞれアンケート調査を行った。被験者全体について表１のようにまとめておく。

表 1. 被験者のプロフィール

	初級 (人)	中級 (人)
中国語母語話者	66	98
韓国語母語話者	33	29
マラーティー語母語話者	41	32

角田 (1991) の分類を参考にして、他動性の強さによって典型的動詞・形容詞を分類し、語彙的意味別に問題文を作成した。また日本語の特殊用法で学習者を悩ませる、「通過」「出発」「帰着」という目的語が場所を表す述語、例えば「歩く」「卒業する」「座る」なども今回のアンケートに入れておいた。格枠組「がーを」が 40 問、「がーに」が 32 問であり、これにコントロール課題 14 問を加える。各語彙的意味の問題数は表 2 に示すとおりである。

表 2. 各語彙的意味の問題数

「がーを」	問題数	「がーに」	問題数
影響	6	無影響	6
無影響	6	感情	6
感情	6	変化	4
知覚	4	帰着	6
追求	4	生理的･心理的変化	6
知識	4	能力	4
通過	6		
出発	4		

主たる統計的分析手法として、SPSS による ANOVA を用い、それぞれの述語の語彙的意味に対して、平均正答率を算出し、2 種類ずつ平均正答率を比較し、多重比較の方法の 1 つである Tukey 法を採用して有意差を検出した。

2.1 平均正答率

格枠組「がーを」をとる述語に関しては、表 3 に示すように「影響」「無影響」「知覚」では、3 ヶ国の被験者ともに比較的に高い平均正答率を得た。しかし、中国語母語話者と韓国語母語話者では平均正答率が高かった「知識」において、マラーティー語母語話者の方がやや低めである。さらに「通過」など日本語の特殊な語彙的意味では、習得のスピードは他の語彙的意味と比べて相当遅い。

表 3. 格枠組「がーを」をとる述語

語彙的意味	中国語	語彙的意味	韓国語	語彙的意味	マラーティー語
影響	82%	影響	94%	影響	81%
無影響	80%	無影響	95%	無影響	79%
感情	60%	感情	86%	感情	34%
知覚	95%	知覚	94%	知覚	76%
追求	65%	追求	78%	追求	69%
知識	88%	知識	93%	知識	58%
通過	62%	通過	62%	通過	61%
出発	72%	出発	53%	出発	47%
合計	76%	合計	82%	合計	64%

(網掛けの部分が高い平均正答率を得たところである。)

格枠組「がーに」をとる述語に関しては、下の表 4 に示すように「変化」と「帰着」は今回の調査で高い正答率を得たが、「生理的・心理的変化」は平均正答率が 50%を超えられず、特にマラーティー語母語話者は 17%しかなかった。格枠組「がーを」をとる述語に比べて、「がーを」をとる述語は 3 ヶ国の日本語学習者ともに平均正答率が比較的低く、習得のスピードもやや遅い。

表 4. 格枠組「がーに」をとる述語

語彙的意味	中国語	語彙的意味	韓国語	語彙的意味	マラーティー語
無影響	56%	無影響	69%	無影響	47%
感情	54%	感情	55%	感情	65%
変化	84%	変化	75%	変化	67%
帰着	84%	帰着	82%	帰着	80%
生理的･心理的変化	42%	生理的･心理的変化	48%	生理的･心理的変化	17%
能力	68%	能力	83%	能力	30%
合計	65%	合計	69%	合計	51%

(網掛けの部分が高い平均正答率を得たところである。)

2.2 有意差検定

統計分析を行った結果、述語の語彙的意味が学習者における格助詞の選択に影響を及ぼすことが判明した。格枠組「がーを」をとる述語では「感情」「通過」の意味タイプ、「がーに」をとる述語では「生理的・心理的変化」の意味タイプで有意差が一番顕著であり、さらに「がーを」述語より「がーに」述語の方により多く有意差が見られ、学習時間による有意差の変化がより激しいことが分かった。

中国語母語話者とマラーティー語母語話者は学習の初期段階において述語の語彙的意味が格助詞の選択に相当に影響を与えているが、日本語能力に応じてその影響が段々弱まっていく傾向にある。しかし、韓国語母語話者にとって述語の語彙的意味は格助詞の選択にあまり影響を与えていないように見え、有意差が見られたところが少ない。また、3 ヶ国の学習者における有意差の分布状態 (表 5 から表 8 を参照) を観察すると、日本語レベルが何であれ、中国語母語話者は均等的な分布状態を成しており、韓国語母語話者はいくつか (「追求」「通過」および「出発」) の語彙的意味に集中している。しかし、マラーティー語母語話者は学習の初期段階において中国語母語話者と類似した均等的な分布状態を成しているが、中級レベルになると、韓国語母語話者のようにいくつか (「感情」と「出発」) の語彙的意味に集中している分布状態になった。

表 5. 中国語母語話者の有意差分布状態

	影響	無影響	感情	知覚	追求	知識	通過	出発
影響			＊	＊	＊		＊	
無影響			＊	＊	＊	＊	＊	
感情	＊	＊		＊		＊		＊
知覚	＊	＊	＊		＊		＊	＊
追求	＊	＊		＊		＊		
知識		＊	＊		＊		＊	＊
通過	＊	＊		＊		＊		＊
出発			＊	＊		＊	＊	

(＊ $p < 0.05$)

表 6. 韓国語母語話者の有意差分布状態

	影響	無影響	感情	知覚	追求	知識	通過	出発
影響					＊		＊	＊
無影響					＊		＊	＊
感情							＊	＊
知覚					＊		＊	＊
追求	＊	＊		＊		＊	＊	＊
知識					＊		＊	＊
通過	＊	＊	＊	＊	＊	＊		
出発	＊	＊	＊	＊	＊	＊		

(＊ $p < 0.05$)

表 7. マラーティー語母語話者(初級)の有意差分布状態

	影響	無影響	感情	知覚	追求	知識	通過	出発
影響			＊		＊	＊	＊	＊
無影響			＊	＊	＊	＊	＊	＊
感情	＊	＊		＊	＊	＊		＊
知覚		＊	＊			＊	＊	＊
追求	＊	＊	＊				＊	
知識	＊	＊	＊	＊				
通過	＊	＊		＊	＊			
出発	＊	＊	＊	＊				

(＊ $p < 0.05$)

表 8. マラーティー語母語話者(中級)の有意差分布状態

	影響	無影響	感情	知覚	追求	知識	通過	出発
影響			＊					＊
無影響								
感情	＊			＊	＊	＊	＊	
知覚			＊					＊
追求			＊					＊
知識			＊					＊
通過			＊					＊
出発	＊			＊	＊	＊	＊	

(＊ $p < 0.05$)

3. 考察

3.1 格枠組「がーを」をとる述語について

格枠組「がーを」をとる述語について「感情」「通過」の意味タイプで学習者における有意差が一番顕著である。

「感情」に関しては母語の文法に影響される傾向が見られる。母語が他動詞の場合や「を」に相当する格助詞を使用している場合は、正しい答えを選ぶことができる。しかし母語の文法系統と異なる場合には、母語の文法をそのまま日本語に持ち込み、誤用をおかしてしまっているのである。またもう 1 つ忘れてはならない要因として、日本語自体の複雑がある。格助詞とその意味用法との間に一対一の関係が日本語では見られないが、学習者はこのような複雑で混乱した点に関して間違いをおかしやすいことが指摘されている。さらに、「尊敬する」「同情する」などの行為や態度において主語から対象への方向性が見られることから、。方向を示す時に使われる「に」が適切な答えであると判断してしまうと考えられる。ここで挙げた「言語転移」「日本語自体の複雑さ」および「述語の語彙的意味」という 3 つの要因が相互に影響し合って誤用を起したのではないかと認められる。

また「を」が通過点を表し、場所に属する名詞と合わせて使用するのは日本語の特殊用法であり、学習者がこの用法を理解しにくいため、「通過」の平均正答率が低いのではないかと考えられる。場所名詞が「に」「で」などと共起しやすいという仮規則が学習者に作用していると考えられる。今回取り上げた 3 言語の格表示体系では、「に」「で」「から」に相当する格表示が一番よく使用される。以上のことによって、学習者の母語、および「場所 + に (で、から) 」という学習者によって作られる仮文法規則 (過剰一般化による) の 2 つの要因が重なって作用して、誤用を起こしたと分析される。

3.2 格枠組「がーに」をとる述語について

格枠組「がーに」をとる述語で有意差が一番顕著である「生理的・心理的変化」について検討する。全体からいうと、「生理的・心理的変化」の誤用は母語からの転移によるとは言い難い。被験者の答えを分析してみると、ほとんど「から」「ので」など「原因」を意味する機能語が使われている。被験者は問題文の空欄に「原因」を意味する機能語を入れなければならないと分かっており、既に習った格助詞から答えを見つけようとしているのではないかと考えられる。「に」にも原因を表す機能があるが、心理活動を表す動詞に限られ、日本語の中でも珍しい用法である。さらに原因を表す格助詞としては早い段階で導入される「から」などの方が学習者にとってなじみやすく、原因の「に」はむしろ中・上級レベルになってから導入されることが指摘されている。したがって、ここでの誤用は単純に母語の転移と日本語の複雑さによるものだけではなく、学習者独自の文法による「過剰一般化」に起因すると考えられる。

4. 誤用分析

4.1 言語転移

調査結果によると、3 言語の被験者が類似した誤答パターンを見せた。問題文に出た述語が自分の母語と同じような格助詞体系をとるなら、被験者は正しい格助詞を使える比率が比較的に高く、日本語とズレのあるところでは間違いが出てくる可能性がより大きい。

なお、2.2 にも述べたように、3 ヶ国の母語話者における有意差の分布状態に差異が観察されている。中国語では日本語のような完備した格助詞体系が備わっていないためか、中国語母語話者は「を」「に」の選択においてほとんど全般的に述語の語彙的意味に影響され、有意差が均等的な分布状態になっている。それに対し、韓国語は日本語と類似した格助詞体系を持っているので、韓国語母語話者の格助詞の選択における語彙的意味の影響は比較的小さい。ただし「追求」「通過」「出発」の 3 つでは日本語と異なる格助詞が使われ、他の語彙的意味より大きく述語の語彙的意味に左右されているため、有意差がこの 3 つの語彙的意味に集中しているのであろう。マラーティー語には日本語文法と似たところもあれば異なったところもあり、それはマラーティー母語話者が他と異なる有意差分布状態を見せた原因なのではないかと考えられる。学習者が初期段階では、特に自分の母語と格表示の方法が異なる部分で有意差のある項目が数多く見られた。この現象を顕著に見せるのが中級被験者である。その後、日本語と比較的に近いところは徐々に習得されていき、他の語彙的意味との差が減って日本語に遠いところだけに有意差が残っていると結論付けられる。

4.2 過剰一般化

本調査の結果として、学習者の母語の違いにかかわらず、次のような偏った傾向が見られた。対象を表す格が人間に属する名詞である場合に「に」を選択し、また「位置 + に」、「地名 + で」という連鎖がしばしば学習者の回答から観察された。学習者が格助詞を選ぶ際に、前の名詞の種類によって規則的に使い分け、名詞が格助詞と 1 つの単位として使われる傾向が強いことが分かった。このように、学習者は独自の方法・ストラテジーを使って言語処理を行い、規範の文法とは異なった学習者独自の文法を作り上げていると言える。

「影響」「無影響」では 3 ヶ国の母語話者とも平均正答率が高いレベルに達したが、被験者の誤答のなかで、特に「に」が多数を占めている。学習者の母語の影響を除くことはできないが、学習者が「に」を答えとして選ぶ傾向の強い背景に、学習者が日本語の文法規則を過剰に適用してしまう「過剰一般化」の作用も見逃せない。人間を指す名詞が「に」と共起しやすいという印象が学習者の頭の中にはあり、問題文に出た述語が方向性を持つ場合、「に」が正しい答えなのではないかと被験者は考えるのかもしれない。また「追求」においても格助詞の前に来る名詞が具体物なら「を」、場所なら「に」をつけるというような結びつきが見られる。

さらに 3.2 にも述べたように「生理的・心理的変化」において、学習者は初期段階で習った「から」「ので」など原因を表す格助詞を不適切なところにまで過剰に適用し、結果として誤用を起こしてしまっている。そこで、「過剰一般化」はここでの誤用の要因の 1 つであると考えられる。

5. 総合的考察

初級学習者はまだ母語から強く影響を受けているので、母語での語彙的意味や用法にもとづいて問題に答えるのが普通である。習得が進むにつれ、日本語そのものを意識の中に入れ、独立の学習項目として考えるようになる。母語と日本語の格助詞体系が似ているか否かが、学習者の格助詞の定着の難易度を決めているのであろう。このように、学習者の誤用は母語と日本語の文法体系間の差の大小に関係があり、格助詞の選択は、初期には母語や言語普遍的な述語の語彙的意味にもとづき、次第に日本語文法特有の事項が習得されることが結論づけられる。

結果として、他動性の差が学習者の選択に影響を与える点については大きな関わりをはっきりと示すということは見られなかったが、異なる語彙的意味では格助詞の使用に相違があるということは確実である。また学習者の母語と日本語の文法体系が近いか否かということが格助詞の選択に影響し、日本語の文法体系に近ければ近いほど、格助詞を正確に選ぶことができるということが判明した。つまり学習者の誤用は言語間の距離と関係付けられるものであると認められる。さらに学習者における「を」「に」の選択は言語普遍的に共通して使われるプロトタイプ的なものより、日本語だけで使われる述語の周辺的な語彙的意味の方が習得しにくいと推論できる。

参考文献

角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版.

本研究は、東北大学21世紀COE プログラム (人文科学) 「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」の補助を一部受けて行われています。